

小館衷三著

『津軽の民間信仰』

篠村正雄

本書は、著者が今までに発表した『津軽藩政時代に於ける生活と宗教』、『岩木山信仰史』、『水神・竜神・十和田信仰』を含め、これまでの研究の蓄積を整理し、教育社の歴史新書として出版したものである。

内容は、概観で民間信仰を定義し、津軽宗教史の推移をまとめ、津軽の民間信仰体系を三通りに分類している。ついで、1、信仰の受容では、伊勢信仰、観音信仰、稲荷信仰、2、津軽の神々では、熊野信仰、水神・竜神信仰、地藏信仰、北斗信仰、3、待信仰では、庚申待、日待・月待、甲子待、巳待、4、民衆と宗教行事では、その他の民間信仰、津軽の年中行事を載せ、終りに研究史、参考文献を付している。

研究史で、著者は、「民間信仰を歴史的に取り扱にしても、基本的にその土地の歴史的解明がなされないであろうにもならない」とし、時代認識を基礎にしなければならないという研究姿勢を明らかにしている。このことは、「足でかせぐ」といわれるほど、津軽地方から秋田県北地方まではもちろんのこと、近畿地方まで調査し、古老から埋没しつつある民間信仰の事象をほりおこし、民俗学と歴史学の狭間にあるものを浮びあがらせている。また、青森県の「古代の正史自体が……伝説の

域を出ない程度」と述べているが、中世に関する史料もわずかに散在するだけで、今後の史料の発見も期待できず、このことが、青森県の古代・中世史の解明を困難にしている。しかたなく、近世の史料から中世をうかがう方法をとるが、これの論証の弱さは、いうまでもない。このところを、著者は、『津軽藩政時代に於ける生活と宗教』から『岩木山信仰史』にかけて、津軽地方を比叡山文化によって解明する方法をとった。この方法は、著者が調査を進めるなかで芽ばえたものであろうが、私は、ある会議の前に、著者と宮崎道生先生（現国学院大学教授）が、比叡山文化の日本海岸を北上する線上で、加賀の白山をどのように位置づけるかで、激論をたたかわしたのを聴いているが、このような機会に自己の方法論を磨きあげていったように思える。それは、「素朴なままの信仰形態のなから古い文化の流れを汲み出し、また中央文化の光をあててみたい」としているように、津軽の民間信仰の事象が、他の地方や中央のものど、深いかわりをもっていることを見通している。著者によるこの輝かしい研究成果が、本書にもちりばめられて光彩を放っている。

このように、津軽地方を比叡山文化でみるといった新しい問題意識を試みることが、他の研究分野でも行なわれれば、青森県の歴史が、一段と明らかになるものと考ええる。

一〇頁に、「比叡山文化の流れが北上して浸透してきた。すなわち、天台宗―台密系の仏教」とあり、一四八頁に台密の説明があって、全体を読み進むと、台密のことがわかるようになってくるが、この辺は、日本仏教史の講座を聴いた者でないと、理解に苦しむと思われる。やはり、はじめにでてくるところで、『津軽藩政時代に於ける生活と宗教』でみ

せたように、日本天台宗の山門（延暦寺）と寺門（園城寺）の分立、東密（真言宗東寺の密教）に対する台密の形成、台密が修験道と結びつき、熊野信仰、白山信仰を包含していく様子を記述しておくことが、読者に親切であろう。

仏教は、死者礼拝や祖先崇拜と無縁であったが、これをとりこんで葬式を行ない、引導を渡すことで、解脱・涅槃したはずだと説明する。しかし、死者から残されて生きていく庶民の悲しみは、どうすることもなく存在する。このところに、現在の民間信仰が根強く保持されていると思われるが、「いたこ」と口寄せをきく人との接点に、生きる側の悲しみをとらえ、それを著者と仙台放送の平山ディレクターとの対談を載せることで、見事に成功している。

新書にしては、史料をふんだんに引用されているが、二三頁の『代官日記』のように、訳されたとはっきりわかるものと、一四三頁の「甲子待」の碑文のように、原史料をのせたのではないかと思われるものがある。そこで、原史料と思われるものを、数点にわたり照合してみたが、訳や省略がなされてある。一般読者に向けたものであっても、史料についてのことわりがあったほうがよいと思う。

本書は、津軽藩四代藩主信政が、惣右衛門稲荷（安左衛門稲荷）を、新寺町（弘前市）に祀らせたとする。羽賀与七郎先生（弘大名誉教授）は、昭和五〇年四月一日付「東奥日報」の「みちくさ郷土史」に、安左衛門稲荷として紹介しているが、これは、『藩庁日記』によったものとみられる。『藩庁日記』宝永五年一〇月一六日の条に、藩より貞昌寺入誉へ、鳥居の横額の書き方を、「稲荷大明神 武州熊谷安左衛門武頼勸請」と

指示しているが、この時に作成したと考えられる額が、稲荷社に現存する。また同年一〇月の棟札に、「稲荷大明神堂 陸奥国豊民安繁栄而御造建之御棟札」とある。『津軽一統志』は、稲荷大明神としている。『奥富士物語』は、安左衛門稲荷とし、狐を弥四左衛門とする。『浅草寺志』によると、『江戸童』には、弥惣左衛門稲荷としてあるという。『弘前の文化財 民俗』は、狐を弥惣左衛門とする。陸奥史談会の社寺めぐりのパンフレットは、惣右衛門稲荷とする。よって、新寺町の稲荷は、「稲荷大明神」であり、浅草の熊谷安左衛門が勸請した熊谷稲荷を祀ったものとみたい。狐の名は、『藩庁日記』から、宗弥といい、祖父宗林と一緒に弘前へ来たという。浅草寺境内にあった熊谷稲荷は、現在ない。『浅草寺志』の境内略図によると、本堂の裏、東北に位置している。同書の頭注には、「明治初年神仏分離の時浅草神社に遷し 千勝神社に合祀せらる」とある。

明治維新の神仏分離で、津軽地方の宗教界が大きな転換をみせ、それが、他藩と異なる点を指摘しているが、神仏分離を別な機会に整えた形で発表していただきたい。また、胎内くぐりが、善光寺の本尊の下を通ることや、さざえ堂（弘前市茂森）、岩木山登山にみられることを、私は初めて知らされたことであり、著者に接した人は、その博学に驚かされるが、寺院・神社に参る時の見どころといったものを、教えてほしいと願う者の一人である。

（新書版、本文二〇九頁、教育社、昭和五十五年、定価六〇〇円）
（板柳高校教諭）